私はこう読む

幼児教育における教材

槇 英子
（大学教員）

二つの座談会

半世紀前の座談会「幼稚園における製作教材」（一九六五年十二月号）を読み、同席していたら何を感じ、どう考えただろうと思い巡らせてみた。

この座談会に先立って、現場の教師以外の同じメンバーによる座談会、「幼児教育と教材」（同年五月号）が開かれている。津守氏はその開催意図を、最近、保育内容や保育方法を考える中で教材が大切であることを痛感しているからと述べている。そして、社会性においても知的な面でも伸びていく教材や教具の投入が必要であり、「少しでも工夫して先生が作れば、子どもの方にも工夫して使おうという意欲がわいてくるもの」であるから、材料や道具に関する基礎的な知識が必要と語っている。それを受けて「子どもは物を媒介にして伸びていきますから」と林氏が述べ、今後の連載の方向性が話しあわれている。

印象的なのは、これまでにも素材や材料に関する連載を担当してきている、小学校に勤務する砂場氏が、執筆内容を振り返り、「半分当たっているような、半分はずれているような気がする」と吐露している場面である。確かにその連載は専門性が高く、セメントや石

槇 英子（まき ひでこ）
淑徳大学教授。著書：『保育をひらく造形表現』（萌文書林）、『倉橋惣三「児童心理」講義録を読み解く』（共著、萌文書林）。

膏などは、幼児が扱う材料ではないだろう。

ところで筆者は、出席者の中では林氏に近い立場である。教材を開発して実際に幼稚園で実践し、材料・用具・援助について現場から学ぶ研究を続けている。一方で、砂場氏の迷いは、造形教育を専門としながら初めて幼児教育の現場に立った頃の筆者の戸惑いに重なり、共感できる。筆者は、そのズレの魅力に取りつかれたのかもしれないが、解消するには、幼児教育の現場、そして幼児に学ぶしか道がないように思う。

十二月の座談会で、現場の先生方の参加を図ったのも、そうした背景があったからかもしれない。専門的な造形の知識と幼児教育の現場との橋渡し役として選ばれたのが三人の幼稚園教諭であったのだろう。そして彼女たちは、見事にその役割を果たしてくれている。

生きて働く知識と生まれる技能

まず、紙についてのA教諭の話がたいへん興味深い。例えば「のし紙」は、系統的な分類では「和紙」で、その中でも丈夫で柔軟な紙であるが、A教諭にとっては、親にとっておかせることができ、長靴が作れる、「そこら辺にころがってるのを探すとある」紙なのである。また、のりを使わない紙の貼り合わせ方の解説は役立ったが「つばきをつけた方が破けないって子どもたちがいう」という話は、場を和ませると同時に、幼児ならではの知恵にハッとさせられる。

現場は、知識や技能に命が与えられる場である。大切なのはその習得より、生きて働く知識や創造的な技能の発見であり、教師の〝面白い〟という見方なのである。

子どもの心と技術

また、何でもセロハンテープに頼る傾向を好ましく思っていないC教諭のかたくなさも印象的である。以前からそうした考えの人の真意を知りたいと思っていたが、努力を教え

ない不幸を避けたい、というC教諭の思いに触れ、簡単に結果を得るより過程での学びを重視する当時の指導に驚いた。

林氏はその後、知識や技術は子どもへの愛情に基づいて用いることが大切と述べ、「アイディアマン」で「リラックスされた精神」であることの重要性についても説いている。事の正否はともかく、かたくなな先生へのやんわりとしたアドバイスでもあったのかもしれない。現在では、無駄遣いを慎ませることはあっても、素材に応じた接着方法の獲得を促す指導が一般的であり、接着用具としてグルーガンを提供する現場も珍しくない。のりだけで試行錯誤することの意義や、諦めてしまう子どもに対する戸惑いなど、接着技術についての対話が保育を語ることにもつながることを教えられる場面である。

また、林氏が「動くことの前に、動いているように感ずる心がある」ことを大切にと述べている部分も印象に残る。それを「佐藤先生に行く前の世界がある」と表現し、技術は、子どもたちの世界を大事にした上で、必要に応じて「いつかゆっくりだす時がある」という構えが肝心と語っている。これは、養成校で表現技術の科目の担当教員が、学生たちにしっかりと伝えなければならない事柄である。

材料・教材とどう出合わせたいか

その後の対話では、驚くほど豊富な材料の名前が登場する。木やくぎは津守氏も扱うことを推奨し、これまでの連載内容に不安を持っていた先生方も、がぜん元気が出てくる。そして、幼稚園の先生自身が多様な材料を試していることが語られる。これは人的環境を通しての教育である。また、子どもたちがもぐりたがるから大きな家を作りたいという。どこまでも〝子ども発〟である。

こうしたやりとりから、あらためて幼児期の知識・技能はいかに獲得されるのか、教材の役割とは何か、幼児教育者としての専門性

とは何か、という問いが浮かび上がってくる。

安全に関する話題からは、それが造形活動における永遠の課題であることが理解される。津守氏が「こういうけがは、自動車事故とか水死とかとは違う」と語っているのが心強い。

そして座談会の終盤では、佐藤氏が、家では「ダメ」「アブナイ」をよく言っている自分にハッとすると語り始める。大人の押し付けが増えている風潮への不満ではすっかり意気投合し、専門的な知識の提供者と読者との間のズレは埋まっていき、まるで、新しい紙の貼り合わせ方が見つかったかのようである。

座談会の背景とこれから

ところで、これほどに造形的な専門性が必要とされた背景はどこにあるのだろう。

倉橋惣三は、幼児が技巧を要求するのは、物をうまく作りたいときと自分の内からの美への要求を満足させたいときであるとし、保育者自身の要求の満足を標準として技巧を教え示すべきではないと述べている。[注] 一方、幼児の要求に準じて考えられ手伝われるべき技巧は高いものではないが、手技製作においては、保育者が自ら生活することによる誘導の必要と効果が高いので、うまく作れるような修練が必要とも述べている。そうした考え方が、三十年後の座談会の基底に流れているのだろう。その流れが現在の養成教育では失われつつある。

さて、今やアプローチカリキュラムが求められる時代である。扱う材料や教材に関しては、これまで以上に幼小の連携が必要となる。幼児教育に求めるものとして、はさみの使い方を挙げる小学校教員も少なくない。そうしたさまざまなズレを解消するためのヒントが、この座談会にはあるのではないだろうか。

注 倉橋惣三「及川文子氏著『幼稚園の手技製作』に題す－幼稚園手技製作論－」『幼兒の教育』第三十二巻第八・九号（一九三二年）